

SY3-3

看護からみた移行期医療

丸 光恵

甲南女子大学看護リハビリテーション学部 看護実践学分野 国際看護開発学領域

かつて小児看護は、成長発達支援がその中心的役割と教えられてきた。しかし、成長発達したその先に、小児期発症の慢性疾患をもつ成人患者として、その人らしく生きるためには何をどう準備したら成長発達支援になるのかはあまり意識されてこなかったように思う。

筆者は2009年より、成人移行期支援看護師養成講座を開催し、看護師の為の成人移行期支援ガイドブックを作成した。移行のためのチーム作りに始まり、チェックリストを用いて準備状況をアセスメントし、移行計画を立て、転院・転科をゴールとする。初めは試行錯誤であったが、受講して下さった看護師から多くのフィードバックを頂いた。多く看護師は、成人期への移行準備は従来の小児看護の一部として行えるものであり、だからこそ医療者が主体の成人移行期支援は問題視している。移行期医療ほど、患者・家族中心であることを問われているものは無いと感じている。

看護は、常に患者・家族中心型ケア (Patient & Family Centered Care) を提供する事が使命であり、それは成人移行期支援においても同様である。患者・家族中心型ケアの中心となる概念は①尊厳の尊重、②情報共有、③意思決定支援、④協働の4つであり、(Patient family-centered care) 全ての医療に応用できるものである。移行期医療とは、10代患者の多様なニーズに対応し、個々の10代患者にあわせて、新しい医療提供体制を創る事と等しい。医療者は提供者という立場であると同時に、患者・家族と共に考え、ケアの実現に向けて同じ方向を向いて歩む存在である事が求められている。

看護師が最も注目すべき点は、治療・医療の場を移す事ではなく、その人らしい成人を迎えられるかどうかである。移行期支援は「その人らしい成人期」を迎えるための支援であり、成人患者としての受療行動を獲得するための移行プログラムは、既存の小児のトータルケアの中の一部である。患者にチェックリストだけに答えてもらう、などという移行プログラムの断片的な活用は、有益な移行期支援とは言えない。個々の患者のニーズを知り、ゴールをどこに定めるのか、共に模索しながら進むプロセスこそが移行期医療のかなめとなる。また、組織的体系的で継ぎ目のない看護が提供できるよう、成人医療の看護師との連携も模索する必要がある。